一枚摺の魅力

――明治の引札と大小暦――

内海寧子

江戸時代の暦

一枚摺の魅力をご紹介する序章として、まずは、天空の話からお付き合いいただきたい。

月の満ち欠けと太陽の動き（地球の公転運動）から決めた暦が、江戸時代の太陰太陽暦、いわゆる旧暦である。これは、1ヵ月の日付を月の満ち欠けに合わせて決めるものだ。天体の月は新月から次の新月に至るまで、約29.5日を要する。このため、1ヵ月が30日、または29日という、大小ふたつの月をつくって暦を調節した。しかし、この大と小の組み合わせでは、次第に季節と日付にずれが生じてしまう。そこで、閏月をおいて1年が13ヵ月になる年を数年に一度、設けていたのである。

現在、1年は12ヵ月。しかも、小の月にあたる30日（28日）の月は「西向く士（さむらい）（二・四・六・九・十一月）」で固定している。しかし、太陽暦が採用される明治6年以前は、月の大小が毎年入れ替わるため、その年毎に大小の順を把握する必要があった。そこで登場するのが「大小」と呼ばれた「大小暦」である。

大小暦

大小暦は、一年間の大小の順を、短い文章や絵で示した略暦である。例えば、甘党の私も大好物な

大好（ズキ）は雑煮草餅柏餅
盆のぼた餅亥の子寒餅

という和歌も、実は、宝暦13年の大小暦になっているのだ[1]。「大好」つまり大の月は、雑煮（正月）・草餅（3月）・柏餅（5月）・盆のぼた餅（7月）・亥の子（10月）・寒餅（12月）と、餅づくしで表した暗記文式の大小暦である。

江戸時代、絵の中に大小を配して木版摺にし、年始の挨拶として知人に贈呈する習慣があった。明和2年（1765年）には、牛込の旗本、大久保甚四郎巨川（きょせん）・阿倍八之丞莎雞（さけい）が中心となる、絵暦の交換会がおこなわれ、大小暦の摺物が江戸で大流行した。この時、鈴木春信が多色摺の絵暦を提供しており、これが錦絵誕生の契機となっていることは、周知のとおりである。当時の大小暦に見られるさまざまな趣向については、岡田芳朗氏が『江戸の絵暦』（大修館書店、2006年）で紹介しているが、謎掛けの一種である、判じ物になっているものが多い。

鬼洞文庫の正月引札

さて、関西大学総合図書館のコレクションには、岸和田の蒐集家・出口神暁氏が蒐集した文庫、「鬼洞文庫」がある。鬼洞文庫のコレクションには、和泉・大阪の郷土史に関する書籍とともに、番付や引札などの一枚摺が多数含まれている。2005年、なにわ・大阪文化遺産学研究センターの学芸遺産研究プロジェクトが、鬼洞文庫の引札調査を実施し、私も調査の様子を拝見した。

画像1

調査中の引札を眺めているうちに、一枚の引札に目が留まった【画像1】。筆を右手に色紙を見つめる大黒さま、その傍らに立つ弁天さまといった正月引札である。正月引札とは、正月に商店が顧客に配った店名入りのちらしであるが、ちらしとはいえ、部屋に貼って眺めるインテリアの役割をも果たしていた。上掲の正月引札では、木綿や金巾（かなきん）の商品名を掛軸に書き連ね、末尾に「右相かわらす御用向の程、希上ます」という口上書を添えている。左の看板に記

されているのは、店の商標や所在地、店主の名前だ。さて、自筆の書に満足げな大黒さまであるが、何としたためたのであろう。

かづかず　めでたく　ぞんじ候

「大いにめでたいことでございます」という意味の新年の祝言である。色紙の上部にはもう一筆、「すむハ大　にごるハ小」とある。はて、どういう意味かしら、と頭を絞っていると、同じような引札がもう一枚あるという。

画像2

こちらでは、恵比寿さまと福禄寿が楽しげに巻物を広げている【画像2】。二人の足元には、打出の小槌、隠蓑、隠笠、宝やく、分銅、宝珠などが散りばめられた、宝づくしのめでたい風景。縁起物の正月引札である。巻物に商品名と口上書があり、看板に店名を掲げる趣向が、先ほどとよく似ている。右側にも看板が掲げられ、何か記されている。

すむハ大　にごるハ小
かずかずめでたくぞんじ候

同じ詞である。「すむは大、にごるは小」。「かずかず・めでたく・ぞんじ候」「カ・ズ・カ・ズ・メ・デ・タ・ク・ゾ・ン・ジ・候」…。しばらく考えて、あっと思い当たった。大小だ。勘のよい方ならもうお気づきのことだろう。これらは判じ物の大小暦になっているのだ。

大小暦の謎解き

暗号文の謎を解いてみよう。「かずかずめでたくぞんじ候」は12文字からなり、一年間の月数を表している。それでは、「すむは大、にごるは小」とは、何のことだろう。これは、江戸時代の大小暦によく用いられる清濁大小の手法で、各音節の清音・濁音の別で月の大小を表している。この場合は、「すむハ大」なので清音は大の月、「にごるハ小」で濁音は小の月であるから、次のようになる。

1	2	3	4	5	6	7	8	月
カ	ズ	カ	ズ	メ	デ	タ	ク	
大	小	大	小	大	小	大	大	

9	10	11	12	月
ゾ	ン	ジ	候	
小	大	小	大	

「西向く士」が小の月となる、現在のカレンダーと同じ暦が隠されていたのだ。これらは、【画像2】の背景に掲げられた紀元節などの御祭日、さらに、染料に使用された鮮麗な紅色から考えて、改暦後の明治期に作成された摺物であろう。

暦の歴史をひもとくと、判じ物になった大小暦の存在が頷ける。江戸時代には、暦の頒布が幕府に統括されており、暦を自由に作成し、販売することが禁じられていた。改暦後も10年間は、頒暦商社が独占権を握っており、暦を自由に頒布することは制限されていたのだ。判じ物で表した大小暦は、遊び心に富んだ、知恵の結晶といえるだろう。

新しい暦のもと、判じ物の大小暦が次第に姿を消していくなかで、江戸の機知が最後の輝きを見せる一枚摺である。

【画像1】
関西大学総合図書館所蔵
「木綿金巾紅無地同紅板〆類同鬱金紅染元仕入所［引札］」
【画像2】
関西大学総合図書館所蔵
「金巾染地類ゆうきじま有松絞り染手拭小倉帯地［引札］」

---

① 松浦静山『甲子夜話』第61巻（『甲子夜話』4、東洋文庫333、平凡社、1978年）。この大小は宝暦13年のほか、文政8年の大小としても通用するものであったという。